

## 中世ヨーロッパの手工業者 I

坂 本 信 太 郎

### はじめに

私は先の「メンデル家12人兄弟館の書」について”の記述に於いて、折りに触れ、その理解に資する為に、極めて不十分ではあったが当時の周辺の状況、ヨーロッパ中世の手工業そしてツunft等に言及して来た。そしてこの際に多くの方々の著者、論文、資料等を利用、参照させて頂いた。有難く深謝申し上げます。

当初、本稿で「ランダウア家12人兄弟館の書」について”を記す予定であったが、都合により予定を急遽変更させて頂き、代わってこれらの書の理解をより深めて頂く事を願って、改めて中世西欧手工業者の状態や生活の様相を述べさせて頂くことにした。先の「兄弟館の書」の為に心覚えに収集したカードやノートに基づいて、表題の事柄を、まとめ整理して参考の資に供したいとおもう。

2回に分けて記すことにし、本稿では手工業者②ツunftの成立迄とする。再び上記の諸著書、論文の御助力を頂く訳であるが、何分にも浅学非才のため、不適切の点が多々生ずる事と思われる。切に御寛容の上、御教示を頂きたく思っている。

## 目次

## はじめに

## I 中世の世界

## II 村落社会と自然経済

## III 商業の復活と都市の成立

## IV 手工業者

## ① 手工業者

## ② ツンフトの成立

## ③ ツンフト制度

## ④ 手工業者の生活

## ⑤ 雇職人組合

## V ツンフトの崩壊

## おわりに

## 参考文献

## I 中世の世界

紀元4世紀末から15世紀初頭迄が世界史の上で中世と言われている時代である。302年、強大な力を誇ったローマ帝国の衰退は今や覆い難い状態となり、それに乗じてフン族の脅威に追われたゲルマン民族のローマ帝国への大移動が始まる(375年)。やがてその矛先は、東西に分裂したローマ帝国(395年)の西ローマ帝国に向けられた。そして西ローマ帝国は476年滅亡し、幾つものゲルマン部族国家に分裂する。ここに中世ヨーロッパ世界の扉が開かれ始めるのである。

まず、ゲルマン部族国家の一つであるメロヴィング朝フランク王国初代国王クロビウスは古ゲルマン以来の多神教の世界を捨てて、496年、一挙にカトリックに改宗した。それによってキリスト教徒(カトリック)で遙かに高度な文明を持つローマ人との融和を意図したのである。それはまた、ゲルマン文化とギリシャ・ローマ古典古代文化及びキリスト教文化の三者の融合を図るものであったが、まだその時期を得たものではなかった。

これら三者の融合が可能になり、ヨーロッパ文化の基として統一化され、ヨーロッパという新しい綜合体形成の萌芽が告げられる様になるのは、メロヴィング朝の後を襲ったカロリング朝フランク王国の出現に於いてであった。それは紀元800年、全フランクを統一したカロリング朝二代目のカール大帝が、聖ピエトロ寺院で参詣中に突如、ローマ法王レオ三世によって戴冠されてローマ皇帝に即位した時であった。

カール大帝の官僚政治を支えた財源は、地中海商業からの関税収入と農民からの貢租であったが、十分ではなかった。

当時のヨーロッパに於ける農業はまだ技術が遅れていて、施肥も満足には行われていない状態で、重要な肥料は厩肥であった。しかし、この肥やしさえ極めて少量しかなかった。牛馬の数は少なくなかったが、一年のうち春から秋までの間は野外に放牧しており、厩肥を収集できる屋内での飼育期間は冬期間だけに限られていたからである。従って耕地の地力は急速に消耗し、安定した農業を続ける事はなかなか容易ではなかった。生産力も低く、その為、皇帝や国王達、大権力者の一群は領内の一地点に定住している事ができず、一族郎党を引き連れ、絶えず各領地を巡遊して、現地徴税に頼る生活を続けなければならなかった。

農業生産力の劣る所領の農民を叱咤し、管理、監督し、亦、或る時には侵略者や外敵から保護する為に、常に農民の傍らに起居を共にする守護者でもある権力者が必要となる。しかし、前記の様に、よほど別個の高収入が存在しない限り、小権力者以外では不安定にならざるを得ない。

845年、ヴァイキングと呼ばれる海賊で、交易を業とするノルマン人が幾度となくフランクの海岸及び内陸の各地に侵入し、掠奪、破壊の限りを尽くした。この際、各地に城砦を築いて戦い、領民を必死に守護したのはこれら小権力者達であって、国王達ではなかった。おのずと周辺の農民達が小城主を頼って参集するようになった。国王達は実体としての権力を持たず、唯権威の所持者と

いった地位に甘んずる状態だった。小城主達は一層領地を整備し、権力を充実させ、名実共に支配者としての地位を確定していった。排他的な独占的な封建領主の出現である。

10世紀後半から11世紀、12世紀にかけて、鉄製農具が普及し、森林、荒蕪地の開拓、耕地面積の増大、そして三圃制農業技術の採用による農業革命が生じた。この三圃制農業をスムーズに実行するためには、農民達が村の決議に一致して従わなければ出来なかった。まず大型の有輪犂が有効に使用出来るよう無秩序に散在する小耕地の交換分合をして、少なくとも60エーカー以上の大きさに集約しなければならない事。また播種する作物の種類や耕作・収穫作業の開始時期や期間など村全体が一定の秩序の下で行動しなければならない事である。どちらも村民に村の決定に服すべき事を強制するものである。今まで纏りのなかった農民生活に強い規制が加えられることとなり、村落組織の形成がもたらされるに到ったのである。

村落の支配者である封建領主は、王の家臣や貴族、騎士といった俗人に限らなかった。司教や修道院長の様な聖職者になる事も多かった。それは10世紀、オットー大帝がドイツ全土に散在する修道院と司教座を掌握し、皇帝の名の下に惜しみ無く土地、裁判権、関税権を与え、司教、修道院長を有力な行政官僚にして、そこからの収入を帝国の重要な財源としたからである。

496年のメロヴィング朝クロヴィスの改宗はキリスト教をヨーロッパの地に据える端緒にはなったが、総てのヨーロッパ人の心を捉え深く浸透する様になるにはなお数世紀の時を要した。

「ヨハネ黙示録」が説くこの世の終末と、最後の審判に対する人々の恐怖心、及びゲルマンの土俗的多信教要素を採り入れた聖者崇拜などが人々の心を捉え、キリスト教を受け入れ易くした。又、10世紀末になって、教会が多数、しかもあちらこちらに建設されて、多くの住民が気軽に心の安息を得る事が出来る様になった。更に12～13世紀になってヨーロッパ全土に教区制が行き渡り、総て

の人々が必ずどこかの教区に所属しなければならなかった事などにより、やとヨーロッパの宗教として定着したのである。

そしてキリスト教とキリスト教会は中世ヨーロッパの精神世界の支配者として君臨するのである。そして亦、キリスト教会組織と同一の位階制構造を持つ中世封建制社会と両々相まって、中世ヨーロッパ世界の頂点に立ったのである。

## II 村落社会と自然経済

中世封建社会の生活は本質的には土地に縛り付けられた農村生活である。自給自足の、変化のない村落での生活である。

農地は領主の城砦或は館を中心に、その周辺に広がっていた。その範囲はそれほど大きくはなかった。盗賊やならず者の一団、掠奪兵が現れた際、見張り塔からのラッパや鐘の知らせで、領民が安全に城内や館の中に逃げ戻れる事が出来る程度の地域であった（せいぜい領主館から半径4～5kmの円内程度ではなかったかと考えられる※）。

この農地には、勿論、領主の所有耕地（その直轄地の一部が城や館を囲む壁の内部に取り込まれている場合もある）及び、自由農民の所有地も含まれている。しかし、これが全てではない。他の領主の所有地や司祭、司教の教会及び修道院所有地等が飛地となって、あちこちに入り組んでいるのが普通であった。

村落農耕地の外側は、深い森林に囲まれているか、広漠とした荒蕪地に続いているのが殆どで、これらによって隣村と隔てられていた。又、侵略者や害獣を防ぐ為に木柵や溝を巡らす事も見られた。

領主は所有地を非自由農民（農奴）や半自由農民（解放された農奴）の賦役を使って耕作させ、一定の賦課租を徴収した。自由農民達の中には自らの意志で領主の保護を得る為に所有地を寄託し、再びその貸与を受けて小作人として耕作し、賦課租を収めて従属関係に入る者も多かった。又、力によって屈服されて小作人になる場合もあった。小作人は領主に従属するとは言え法的には

国王の下にあった。非自由農民が占有物視され、際限ない賦役に追いまくられ、領主の裁判権の下にあったに対し、自由農民は自己の自由をそれほど損なう事なく、ごく僅かな賦役と賦課租を負うのみで、自分自身の為の事に精を注ぐ事が出来た。亦、領主の気ままな意志に支配されがちな領主裁判ではなく、より公平さが期待出来る国王の上級裁判権の下にあった。

農民達は自分の家族ばかりでなく、領主一党を養う為にも、かなりの余剰生産が得られるように精を出さねばならなかったが、多岐にわたる賦課租と頻繁な賦役が相まっていよいよ厳しい状況をもたらしていた。

農民の仕事は、まず穀物、蔬菜の栽培、牧畜、次にぶどう栽培である。収穫した「犁で作られたもの」或は「茎に実るもの」である穀物は、その 1/10 が「十分の一税」で領主に徴収された。更に麻、亜麻、豆、野菜、干し草等の「鋤とシャベルで作られたもの」が「小十分の一税」として、領主及び教会の収入になった。その次ぎの作業は、収穫穀物の製粉、パン、ビール、ワイン、バター・チーズ作り、豚の屠殺、塩漬肉・ソーセージ作り、毛皮、製革、羊皮紙作り、糸紡ぎ、機織り等の加工作業。勿論これらの加工品や作業も税及び賦役の対象であった。更に山仕事、薪集め、製板、柵用杭作り、農具、家具、家屋、小屋の修築・改繕や増築、運搬……の作業が待っていた。これらも亦、当然賦役に加えられていた。

領主の収入は上記のような現物による諸賦課税、賦役からの物品の他に、地代、領主所有の御料林、牧草地や施設、設備（粉引き小屋、パン焼き小屋……）の使用料、人頭税、罰金、裁判料、結婚税、酒税、橋税、通関税、市場開催税等があり、需要を上回るかなりの収入であった。

領内の日常生活は、こうした領民の労働によって自給自足的に満たす事は出来たが、必要とする物を全部生産する事は出来ない事だった。領主や権力者は自からの欲求に応じ、主として贅沢品であるが、農民の中から熟練した者を選び出して作らせるか、領内に居住する少数の賃労働専門職人か、時折やって来

る巡回職人に頼った。或は館から館へ商売して歩く遍歴商人や教会前の広場に開かれる週市などから購入した。農民達も自分の手におえない工業製品、例えば鎌、鋤、鋏、刃物、鍋などの金属製品は鍛冶屋に、靴は自製の革をだして靴職人に、特別なおめかし衣装は自家製の布で仕立屋に、と言う様に村に住み着いた職人に日給を払って頼んでいたが、それ以外の物は自己の工業労働で賄っていた。しかし11世紀末頃迄、買うと言う事は特別の場合に限られていて、一般には相互的贈与形式の交換、提供によっていたのである。従って農民達には、利潤の概念を含む交換即ち商業や、利潤を目的とした工業労働と言う事はまだまだ縁遠いものだった。彼らはあくまでもそれらを、必要に応じた農民労働の副業として行っていたのであって、職業としてではなかった。

ところで、11世紀に始まった農業革命は農民の経済を大きく進展させ、そして賦役工業労働の在り方を変えていった。従来は領主が下賜する原材料を賦役労働で加工生産して貢納していたのに代わって、農民が自家製の原材料を自分の家で加工生産した一定数量の製品を貢納するようになった。つまり賦役労働は次第に消滅してゆき、工業製品の現物納付に大きく変化していったのである。同時に農民の隷属性が崩壊に向かって胎動し始めた。

頻繁な戦争とそれに備えての龐大な軍備費、肥大化してきた官僚群の維持費、貴族的奢侈的物品への欲求などは領主の貨幣需要をいよいよ増大させていった。その為、領主達はその持てる余剰を市場で換金すると共に、農民達の現物貢租を貨幣貢租へ変える事を強制するようになってゆき、そして農民達も生産物の一部を商品として市場で販売換金し、領主の貨幣需要に応ずると同時に、その現金で日用品や諸作業に必要な生産財を購入するようになっていった。更に進んで商品生産を目指して農業活動に励む様になった。

このようにして現物納付はまた更に、より軽い貨幣貢租に移行する事になった。この状態は12世紀以降急速に発展する。そして確実に領主経済も農民経済も共に交換経済の渦中に巻き込まれていくことになった。

※（農村地域の大きさに就いての推算）

- ① これは、ヘッセ「フェルデン農事法関係の展開」（1900，189頁以下）  
 〔ドイツの都市と農村，椽川一郎，p. 243〕に見られる，西北ドイツ農民保有地の面積に就いての1762年の統計に基づいての推算である。
- ② 領主館を中心に円形地形をなしていると仮定する。

統計によれば，14世紀以前では15ヘクタールを耕すフーフエ保有農が標準的だったという。

又，一村落多くて人口1000人，一戸の人数を家族・雇人で3～4名程度とすると，村の戸数は330～250程度となるが，300戸として考えると

$$15(\text{hectare}) \times 300(\text{戸}) = 4500(\text{hectare}) = 4.5 \times 10 \text{ km}^2$$

$$\text{半径を } R \text{ km として } \pi R^2 = 45 \text{ km}^2 \quad \therefore R = 3.8 \text{ km}$$

多少大きく考えて4～5 kmとしたのである。

### Ⅲ 商業の復活と都市の成立

交換という行為は遙か原始社会の頃から行われていたことが知られているが，専ら交換の為に，そして交換によって生活する商人による交換，つまり商業が何時，何処で始まったかは確かめ難い。しかし紀元前3000～2000年頃すでに地中海世界でエジプト人，アッシリア人，ベルシャ人，クレタ人らオリエントの行商人が活躍していた事は確かである。

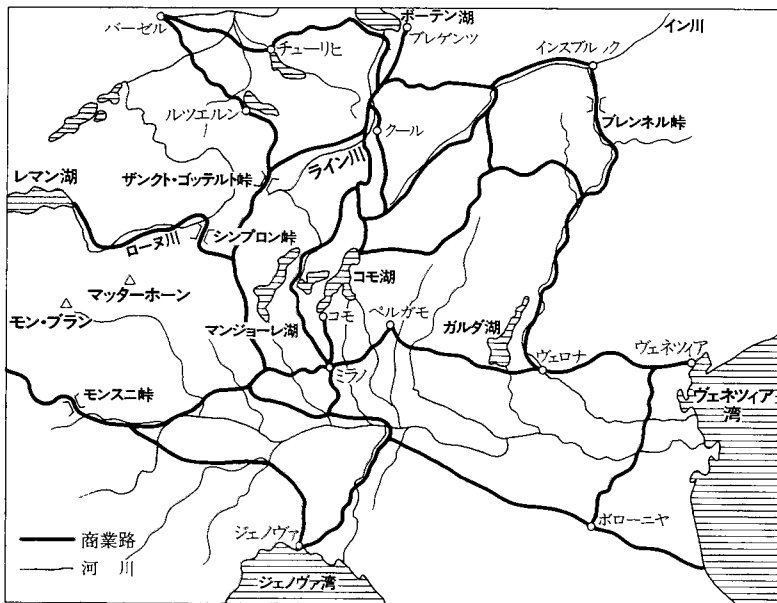
ローマ帝国の時代には，各属州につくられた行政的，軍事的拠点で，オリエントの商人が活発に巡って商取引をしていた。更に彼らは大陸の奥深くまで出掛けて行き，ゲルマン人とも交換を行った。この際，道中，盗賊の危険を防ぐために自警団や警備隊に守られた隊商を組織して行動していた。海上商業に就いても地中海方面を中心に熱心に行っていた。しかし4世紀末，ローマ帝国が分裂すると，商業はビザンチン帝国に存続して栄えたが，西ローマ領内では衰退して行く。その後，西欧の地域では陸上商業も海上商業も消滅はしなかった



が、いよいよせばまっていった。

650年にイスラム教国がエジプトとシリアを攻略し、東地中海を制し、東西の海上交通を遮断、更に711年にスペインを征服した。地中海は今やイスラム教徒に「キリスト教徒は地中海に板切れ一枚浮かべることはできない」と豪語せしめるほど完全な支配の下に制せられ、ヨーロッパ人による海上商業は全く途絶えた。また北海と大西洋沿海、ライン河、セーナ河の河沿いに広がっていた商業はノルマン人の度重なる侵略によって衰亡の道をたどることになった。

8世紀以後、西ヨーロッパは11世紀末までの略300年の間、ひたすら農業経済に専念し、商業を忘失し、商業の可能性さえ排除し、海外と交渉を持たずに過ごす事になったのである。



ヨーロッパ西部商業路と峠

11世紀末、キリスト教徒により地中海は再征服された。

殊に十字軍の遠征を通じて西欧はオリエントの珍奇な、豪華な数々の品々に再会するようになり、その結果、自らの物質的な貧しさを痛感させられずにはいなかった。同時に聖地への巡礼者や十字軍への増援軍、軍需品の輸送など、あわただしい人と物の移動を経験する事になった。

西欧の商業は自らの必然性によってではなく、このような外部からの刺激によってようやく復活への道をたどることになったのである。

復活は地中海方面のみに限られていなかった。北海やバルト海での海上商業も同様、スカンディナヴィア人、スウェーデン人等異教徒の諸民族との接触から再び活発になっていった。そしてこの北の商業圏は南の商業圏地中海とシャムパーニュの大都市で結び付けられ大変な賑わいを見せるにいたる。亦、陸上商業についても例外ではなかった。ヴェネツィア、ポローニャ、ローマ、ヴェロナからブレンネル峠を経て南ドイツへ又ミラノからザンクト・ゴットルド峠を越えてボーデン湖畔の諸都市を経てシュトラスブルク、フランドルへ、或はチューリヒ、バーゼルへ、更にイタリアからモン・スニ峠を越えてフランスへと武装した隊商の列が頻繁に行き交うようになった。

武装した遍歴商人の一隊は次々と各領地の城塞や館、宗教的中心地に開かれる小週市場、そして亦定期大市を訪れて回った。遍歴による商売は頗る危険であり、さすらいの不安定な毎日である。商人達はこうした状態から解放され、安定した暮らしが持てるような、また商品を集荷、貯蔵し、発送するのに好都合な営業と生活の根拠地の設立を求め、集落を作り定住化を始めた。主要通商路に沿った集落、通船可能な河川の沿岸か支流の合流点、非難港の在る海岸地点の居住地、巡礼者の集まる偉大な聖遺物を祭ってある宗教的中心地、権力者が居住する政治的中心地などが適地だった。

新しい富の創造者である商人の流入はそれらの地域に活気を与えたが、同時にそこに以前から住んでいた封建的世界の人々（聖職者、騎士、役人、農民…

…)と種々な摩擦を引き起こさざるをえなかった。

11世紀末頃、着実に、しかも速やかに強固になっていく商人集落は既住住民より優位な地位を占める様になった。そして各種手工業と市場の発展を刺激し、利潤観念の導入、進取の精神、企業精神の目覚めを誘導し、正に物心両面に革新的な変化をもたらすにいたった。これに対し封建諸侯や聖職者は、当初、商人の思想と行為を在来秩序の崩壊を導くものとして危険視し、敵意を持ち、これを阻止、排除し、既存の秩序を押し付けようと努力した。しかしやがて商業を認める事によって生じる不利益より、商業がもたらす貨幣収入の利益の方が有利であることを悟にいたった。そして12世紀初めになると今度は領主諸侯が特権付与の約束までして商人の誘致にすすんで努めだす様になっていった。

商人集落は領主諸侯の中心核周壁内の狭い地域に入る事は出来なかった。止むをえず、周壁と村落の間の外郭 (Vorbürg) に定着し、柵や壁の防塞を回らして居住した。商人の居住地は急速に拡大して行き、ついには中心核を包含するにいたった。そして農村的であった集落の形は都市の形に向けて脱皮を始める。

初めて都市の形が見られたのは紀元前7000年ごろであったと言う。そしてローマ時代には帝国領内の至るところにローマ的都市が行政の中心地として建設された。しかし帝国の衰退滅亡とともにローマ的都市は荒廃し消滅していった。けれども完全に消滅した訳ではなかった。中世の村落的社会の中にあっても教会には依然としてローマ的骨格が維持されていたので、聖職者を領主とする集落はローマ的都市の姿を持続していたのである。ところで集落外壁 (Vorbürg) への商人の流入は在来型のローマ的都市とは異なった新しい型の都市の出現を促したのである。

商人は新しい人である。彼らは元はと言えば領主のもとから逃亡し、有利な仕事を求める出奔者、放浪者であり、土地から切り離され、もはや失うものをもたない人々であり、自分だけを頼りに生きる人々だった。種々の国々の言葉

を知り、各地の風習に通じ、機略縦横、抜け目の無い、勇気と知恵と胆力の持主である。亦彼らの生業である商業は自由な労働であり、土地からも領主権力からも解放された独立した職業であったので、商人達の地位が人格的にも法的にも自由人であり、且互いに平等である事は当然のことであった。

ところで領主の下、集落外壁に定住するようになった商人にとっては、従来の農業社会における恣意的な慣習的法和裁判は種々の点で自分達の活動にふさわしくなかったし、不充分であるのに気がついた。商人達はこれらを廃止して明確で合理的な成文法と商法、そして迅速、厳正にして、再度犯罪を犯させないような厳しい刑罰（絞首刑、肢体切断……）を含む裁判に代える事を要求した。

商人達は新しい都市の組織を作り、行政、司法上の自治権を獲得する為に闘った。これに対し世俗領主や聖職の司教領主からの抵抗は大きかったが、隊商を組み、厳しい危険な長旅を共にした仲間同士の間で育まれた固い連帯感で結ばれている商人達は屈しなかった。彼らは豊かな財力とギルド (Gilde) の組織をもって、先住の人々と共に闘い、勝利を得ていった。

アンリ・ピレンヌ (Henri Pirenne) がその著「ヨーロッパの歴史」の中で「都市とは、防衛施設のある集落で、商工業に従事する自由な住民が居住し、特別法を持ち、発達の様々であるが裁判権と自治体的自立制とを備えた集落である」と定義づけている都市の形成がここに出現されたのである。

各地に市壁を巡らし、きちんと計画された都市が建設され、しかも急速に増加していった。1150年頃のドイツには200程の都市があったようだが、13世紀に入ると、その数は600余にもなっていたと言う。亦、より良い暮らしと都市の自由の享受を望む農民の相次ぐ流入により人口が増大し、狭い都市空間は膨張せざるを得なくなっていった。しかし殆んど都市の人口は5000人以下であった。

付与された色々な特権を持ち、いよいよ強固に組織されていった市民層は、

やがて世俗、聖職の都市領主と肩を並べるにいたり、都市行政にも参画するようになった。

## Ⅳ 手工業者

### ① 手工業者

生活に必要な諸道具を専門に製作する人の出現は、人間が最初に経験した大産業革命である農業技術の開始によって始まる。そして古代エジプト及びメソポタミヤの時代には、多数の壮大な建築物から分かる様に、高い知識と技術を持った専門的労働者が活躍していた事が知られる。

エジプトでは、色々な職業が明確に区分されていて、しかも代々世襲されていたこと、更に手工業者が政治に参加したり、他の仕事を同時にすると厳罰に処せられると言うことが、デイオドロス (Diodoros. 前1世紀末のシチリアの歴史家) の文章から知られている。

ガラス職、金属 (青銅器製作加工) 職、木材職、皮革細工職、亜麻布職、羅紗職、刺繍職、網職、敷物職、染物職、革鞣職、革バンド作り、パピルス作り、大工、家具職、左官、石工、しっくい塗り、色塗り職、屠殺人、小間物職、煉瓦職、壺作り、音楽師、歌手、踊り手などがエジプトの重要な職業で、これらは各々が職人共同体を組織し事務所を持っていたと言う。勿論、このような手工業者の外に、仕事に使役される奴隷も存在した。

青銅に代わって、より優れた有力な金属である鉄が出現して広く使われるようになったのは、ギリシャの時代に入ってからである。鉄の出現が齎した影響は大きかった。単に技術面に就いてだけでなく、人類史上にも及んだ。現代文明の基礎と精神を齎した輝かしいギリシャ文明は本質的には鉄器文明の上に立つものだった。

ギリシャではホメロスの時代 (B.C 9世紀頃?), 各種産業の専門的手工業者であるデミウルゴイ (Demiurugoi) の手で生活必需品の製造が行われていた。

織物職人、染め物師、靴屋、壺造り、漁師、大工、石工、家具造り、造船師、車造り、彫刻師、各種金属加工師等で、大抵の場合注文主から使用材料を支給されて製作していた。彼らは自由人で、公共に奉仕し、時には個々の君主に仕えて仕事をした。そして尊敬を以て扱われていた。

ギリシャにおいて手工業が賤業とみなされ、手工業に従事する者が蔑視されるようになるのは、アテネ、スパルタがギリシャに支配力を行使して、ギリシャに盛期をもたらした時期であった。それは先ず、アテネやスパルタが貴族的な、戦士的な気風の中にあった事、第二に手工業者が公共への奉仕を忘れて、己の利益を貪る事のみに熱中していった事、第三には手工業の殆どの分野が最低階級の手工業奴隷により行われた事によるのであった。しかし後日、産業が大きな力を占めるに至ると、再び手工業者は地位を回復し、家業を世襲し、組合的なものを持つようになる。

紀元前 7 世紀、イタリア半島には高い文化を持ち、商業、工業に際立っていた東方からの移住民のエトルリア人が住みついていた。彼らは技術、特に陶器、絵画、銅、青銅及び鉄の金属加工、武器製造技術に優れていた。亦、南イタリアにはギリシャの植民地があり、エトルリア人達はここを内陸及び海上貿易の拠点にして繁栄していた。ローマ人の共同体はこれらの人々の影響を受けながら発展し続けた。そして前 6 世紀末にいたってローマ市民がエトルリア人の王をローマから追放して共和制の独立国とした。更に、続く数世紀の間にカルタゴを倒し、ギリシャを征服し、前 2 世紀、大ローマ国が成立し、前 27 年、オクタヴィアヌスが元老院から「アウグストゥス」の尊称を受け、大ローマ国は帝政時代にはいったのである。

ローマの共同体は農業を基本とし、その余剰を他の物品と交換した。商業はまだ存在しなかったし、産業も重要な意味を持っていなかった。しかし大工、さらし布職、染物職、壺作り、靴屋、銅・鉄鍛冶屋、ラッパ吹きなどの職人がいて、すでに組を作っていたと言う。

ローマがカルタゴとの戦争に勝ち、勢力が増大して来ると、商業、海外交易が盛んになり、ローマは富裕になり、商業の中心地になった。それにつれて商業的精神がみなぎり、質実剛健をもって知られたローマの貴族達は忽ち、大きな商業利益に魅せられてしまい、商業投機や土地投機に走るようになってしまった。大きな土地を買い占め、耕作は農業奴隷に任せ、その収穫を売りさばいて大きな利益を得ることだけに熱中した。産業についても産業奴隷に任せるだけで、何らの関心も持とうとはしなかった。労働によって金銭を得ることは卑しい事だとする考えが強く生じた。彼らにとっては奴隷を酷使する事は当然の事であり、非人間的な扱いをしても些かも恥じなかった。貧富の差は拡大し、産業は著しく停滞してしまった。多数の奴隷の大反乱は各地に波及し、ローマ都市国家の共同体団結に大きなひびが入り、腐敗、混乱は極に達する。前133年、こうした状態を改革しようとする動きが始まり、約100年に亘る内戦を経てカイサル、オクタヴィアヌスの下に平穏が回復される。そして更に強力な軍隊によりローマの版図は拡がり、2世紀、トラヤヌス帝の時、帝国の繁栄は頂点に達し、各属州に多数のローマ的都市が建設された。各都市は自由放任の経済政策の下、国家によって建設、維持されている道路、港湾、そして軍隊に守られた安全と平和の中で農業、商工業の生業にいそしんだ。

各属州の重要な拠点都市に駐留する軍団には、武器・武具や攻城・防城機械、石砲、カタパルト（投矢機）等を維持修理、改修にあたる手工業者が工兵隊として配属されていた。ヴェゲティウス（Vegetius. 4世紀、ローマの軍事学者）は

「軍団には大工、差物師、車大工、鉄鍛冶、塗物師その他があり、建物、戦争機械、攻城塔等を建造し、更に輸送具の保守、補修を行う。楯、兜、鎧師、矢・投げ玉を製作する弓矢師などがいて軍隊の全必需品の世話をする。彼らの裁きをする者は手工業者自身の長である」。

と記している。この終わりの文から、彼らは組（Zunft）を組織し、組合長の監

督と裁判権のみに服していた事が分かる。亦、この軍団付属の工兵隊の外に、全く同様な作業と運営組織をもった帝国武器工場がローマ帝国全域に散在していた。従事する手工業者は兵士として扱われ、兵士と同じ様に腕に焼印を押された。服務期間も兵士同様に2年間であった。退職後は都市住民負担免除と特別待遇権を与えられた。

手工業組合に参加を希望する者は、組合員の集会を願い、その審査を受け、祖父も父も自分も、町の公職に何の義務も、拘束も受けていない事を集会の席で立証する事が必要であった。採用された者はその職を代々世襲すべき事、又、組員の犯した損害や不法行為は、組合全員の共同責任で負うべき事を強いられた。

一般に組合所属の下記の手工業者親方や指導的技能者は公職負担、都市住民負担を免除されたが、それは彼らに、自分自身の技術修得やまた子弟の教育、徒弟採用に十分なゆとりを必要とすると言う配慮からであった。従って親方や指導的技能者ではない通常の組員にはそうした免除は与えられなかった。それらの職種は

「建築師、建築設計師、医師、画家、铸像師、彫刻師、彫金師、担架用輿作り、錠前師、井戸堀師、車大工（四輪、三輪、二輪）、石工、土木師、左官、メッキ師、武器装飾師、銀・金細工師、宝石細工師、金属板・石版・木版彫刻師、大工、金・銅鍛冶師、金属铸造師、鉛铸造師、染物師、毛皮師、毛皮商人、壺作り、ガラス師、鏡師、象牙師、石膏細工師、鎧師、打印師、衣類洗濯師、機械師、測量師」である。

4世紀末、西ローマ帝国を襲ったゲルマン民族侵入の戦禍と政治的混乱は帝国の経済に非常に悪影響を及ぼした。古い産業地は破壊され、消滅して行き、各地の帝国武器工場は廃墟と化し始める有り様だった。ローマの経済を支えていた奴隷労働に基づく大土地農業経営は奴隷供給の不安定性及び枯渇により今や割に合わないものとなり、奴隷制経営の解体は必至となった。農業奴隷は小



作人に、奴隷職人は主人による貸し職人、或は独立の小職人、巡回手工業者に  
変じて、ヨーロッパ中世に継がれて行ったのである。

5世紀末、西ヨーロッパ帝国が滅亡すると、社会はいよいよ土地所有を基礎  
としたもの、村落的なものになってゆき、都市的な集落は潰滅、商業は衰退し、  
現物経済に後退した。しかし11世紀末、所謂「商業の復活」が始まると、西  
ヨーロッパは再び活発な姿を取り戻した。そして商人および手工業者を主体と  
する独自の共同体である中世都市が、地域経済の中心点として各地に目覚まし  
く成長し、やがて「小都市の網」で西ヨーロッパを覆う程になるのである。

この中世都市の中に、中世都市経済の骨格の一翼を担い、「ツンフト」制度  
を独自に展開していった都市手工業者が現われた。

新しく現われてきた都市手工業者とはどのような人達であったのだろうか？

「荘園法説」によれば自由な都市手工業者の起源は、都市の成立と共に都市  
に諸工業存立の条件が創り出された結果、荘園領主に束縛されていた隷属手工  
業者の中から形成されたのであるという。

9世紀の諸資料、例えば、カール大帝御料地令・第45条を見ると「各荘司は  
その管区に良き工匠たちを備え置くべし、即ち鉄鍛冶師、金・銀鍛冶師、靴師、  
轆轤師、車師、楯師、漁師……網師、パン焼師、なお又挙ぐるに煩わしき他の  
仕人たちこれなり」。(上原専祿訳「カール大帝御料地令国訳嘗試」,「独逸中世  
の社会と経済」昭和24年)と記されている。亦、聖ガレン修道院 (St. Gallen)  
の870年の設計図には金・銀鍛冶匠、鍛冶匠、馬具匠、織匠、轆轤匠、パン焼  
匠などの多数のそして多種の手工業者の作業室が描かれていた。これらの資料  
からすると、荘園領地には多数の隷属手工業者が保有されていたと考えられ、  
亦、荘園領主は隷属農民に対して、直営地の農業労働のみならず、衣料生産  
(紡糸・織布・裁縫・装飾品製作・染色・毛皮)・木工品の製作(桶・机・寝  
台・たらい)・食品作り(ビールやブドウ酒の醸造・パン焼き・菓子作り・  
チーズ・バター)・金属加工(コップ・鎌・聖杯)など、工業製品の賦役労働

をかなり強制していた事を窺わせる。そして、やがて荘園領主が隷属民の労働力を以前より必要としなくなり、生産物での貢租、更に貨幣貢租に変わった時、亦、隷属民自身も貨幣を必要とするようになり、市場向けの製品製造を行い始めた時、ついに隷属関係から解放され、都市に移り住むようになった。こうして都市手工業者の出現が始まったと「荘園法説」は説くのである。

しかし実情はカール大帝の諸規定から程遠いものであったし、亦、聖ガレン修道院の設計図は実現されなかった。それらは、一種の理想状態を示すものに過ぎなかったのである。7世紀から9世紀の時期、荘園内には「荘園法説」が言うようにスムーズに都市手工業者に転換できる程の熟練隷属手工業者、つまり技術的に習練を積んだ手工業に巧みな隷属農民たちは存在しなかった。存在していたのは未熟な隷属手工業者達で、彼らはただ製造・加工の労力と未熟な技術を提供するだけであった。箆細工や縄ない、家屋の修理、織布などの日常的な、比較的簡単な仕事はこのような荘園所属の隷属民で行えたが、難しい作業や上等な製品の製作には領内に居住する職人か巡回職人に頼るしかなかった。或は領主間で互いに領内居住の職人を融通しあったり、紹介しあったりしている文書に見られるように、賃貸の職人を使用するか、近隣の職人や商人から買い求めているのである。

ところでこれらの工業生産において、隷属農民達の手工業労働はまだまだ農業労働から未分離であって、単なる副業にすぎず、本業として行っていたものではなかった。到底、土地から離れた、独立した生業に転化出来るような状態のものではなかった。

これらの事から、G.フォン・ベロウ (Georg von Below) は

「自立的手工業者成立の問題は、不自由民がグルントヘルシャフトから分離して行く問題ではなく、工業生産が消費家族から分離する問題、経済活動の重点が工業活動に移行するという問題である。……家計が必要とするものよりもより多くの生産物を生産し、それを販売してそれによって自己の経済の

その他の補いをうるのである。副業として行っていたこの特別な経済活動が次第に本職になるのである。」

と、隷属手工業者にその発展をたどる事は出来ないと批判し、荘園領内の非自由な手工業労働者と並んで存在していた自由な身分の農村手工業労働者が都市に移り住んだものと考えなくてはならないと論じた。この自由な手工業労働者と領内居住の職人、巡回手工業者それに逃亡して来た不自由手工業労働者たちによって都市手工業者層の主体が形成されたのであると主張するのである。

12世紀中頃迄に工業労働は農業労働から独立した生計手段となり、都市手工業者が成立するのである。

## ② ツンフト (Zunft) の成立

都市に移り住むようになった中世の手工業者は生産者であると同時に、その製品の販売も営む小資本家でもあったので、商人と対立するところがあった。しかし、商人達は遠隔地商業時代の堅い団結精神に基づいて商人ギルドを結成していたし、更に都市門閥の一翼に属し、市参事会員になり市の行政を掌握し支配的地位を占めていた。また消費者保護の政策面から、市当局の公権力を行使して、種々の面に立ち入って手工業者の活動に干渉を行った。これに対して手工業者達も自己防衛と自己主張の為に、商人ギルドに倣って、同業者達の共同体組織であるツンフト（同一職種の手工業者の共同組合）を結成したのである。

西ヨーロッパ諸都市において、最も早くツンフトが発生したのは、9世紀のイタリアの諸都市に於いてであった。その他の都市では11世紀以後であった。

しかしツンフト特許状が初めて下付されたのは1100年の頃である。

大抵の場合ツンフト特許状は都市領主か領主としての大司教、修道院長、又は都市当局か市参事会から授与された。ツンフトが結成されたと言う事とツンフト特許状が授与されたと言う事は、大抵その時期もずれているし、同じ事柄

ではない。例えばケルンの靴屋のツンフト結成は12世紀頃とされているが、ケルン市から特許状を与えられたのは14世紀後半であった。特許状が与えられたと言うことは、ツンフトが司直の承認を得ると同時に、公的な強制団体としての地位を確立させることが出来たと言うことなのである。

ツンフト特許状に見られる内容はいずれも大同小異で、構成員の義務、構成員数の制限、市中に於ける販売・経営権の世襲と独占の権利、規約違反者に対する罰則などを唱っており、非構成員を完全に排除するツンフト強制 (Zunftzwang) の行使に力をかしている。

都市当局者にとって生活必需品の供給を安定的に確保し、市民全員の生活を維持し保護する事、即ち消費者保護は重要な任務であった。亦、まだ都市人口は少なく、市民の購買力も周辺の農民の購買力も貧弱で、市場の消化能力も小さい為、工業製品に対する需要は狭い範囲に限られていたので、手工業者を保護する事も必要であった。消費者の為には、不誠実な製品や詐欺、偽造の防止政策を、手工業者にはその活動を一定範囲内に制約する社会政策を執ることを必要とした。この都市当局者の方針と手工業者が自己防衛・自己主張の為に自ら結成したツンフトの目的は誠に都合良く一致するものであった。

ツンフトの本質的目的は競争の防止であり、ツンフト強制であった。

「ツンフトは、ツンフト強制を遂行する目的で結ばれた自由な手工業者の自由な結合である」とフォン・ベロウ (Georg von Below) は言い、ウエーバー (Max Wrber) は

「ツンフトは、手工業者が職業労働の種類別に作った結合である。ツンフトの機能は二つの点にある。すなわち、内部に向かっては労働の規制を要求し、外部に対しては独占化を要求する点にある。ツンフトは、その目的に到達せんが為に、当該場所に於いて当該手工業を営む所の者が全てツンフトに参加することを要求する」と、このようにツンフトを規定している。

ところでツンフトには、こうした経済的目的のほかに、付随的にはあるが

宗教的な目的も同時に併存していた。

1099年のマインツの都市領主・大司教ルトハルト (Rudhardus) が同市の織布工ツunftに与えた特許状の事項に、「聖シュテファン (St. Stephan) 教会内に織布工達の共同墓地を希望どおり認め譲渡すること、そのために織布工は西門及び教会の屋根を修理すること、並びに蠟燭その他の善行を捧げる事を約束すべきこと」が記されているのを見る。

また14世紀中頃のものと見られる15条15項からなるイングランドのフリーメーソン (国中を雇主を変えては移動して仕事をしていた石工) の規約の中の石工職人に対する9項目の規約に、「神と聖なる教会と全ての神聖なるものを愛し、自分の親方と仲間を兄弟のごとく慈しむべき事……これらの諸規定を守るべく、各人はエセルスタンド王により命ぜられた……」とある。

更に1590年ツウルウズの市町村役場が作成した28章からなる同市町村の針製造職人規約には、「神に奉仕する事、ミサ、祈祷、8月5日の大蠟燭捧持行列への参加義務に始まり、続いてツunft仲間の葬式の手伝いの義務」が明記されているのを知る。

中世の手工業者は当時の人々同様、敬虔で、祈祷に励み、教会の典礼を良く守り行った。そして仲間や他人の為にミサを捧げ、教区教会や大聖堂などへ進んで遺贈・寄進をした。そうする事で各個人の天国での暮らしが保証され、来世の幸せが得られる事を信じていたからである。しかしその為の永代祈祷料は容易ではないが、講社を組み、会員になる事でそれを可能にすることが出来た。手工業者達はこの講社活動をツunftの中に組み込み、構成員全体の幸福を図ったのである。

各ツunftは各々その職業に最もふさわしい一人の聖者を守護聖人として選んだ。例えば、大工はヨゼフ、家具・指物師はマリアの母アンナ、石工・石屋はステファノ或はバルバラ、靴屋と鞣革屋はクリスピノとクリスピニアノ……の様に。

ツンフト員は教会の中に独自の祭壇を設けて祭祀し、聖者の祭日やミサの日には定期的に、又同僚の結婚や葬儀の際にはその都度全員が集会して、一家族の様に祝い、団欒し、且祈り、送った。ツンフトには亦社交的目的も含まれていた。

ツンフト成立間もない12世紀中頃の各都市に於ける各ツンフト構成員の員数は15～30名程度であり、その数は14世紀頃になっても殆ど変わらなかった。

(1991・10・24)